言調聴覚論の基盤としてのP.グベリナの言語論

——*Valeur logique et valeur stylistique des propositions complexes: Théorie générale et application au français*を読んで——

岩見　至

外国語教育の分野において大変有効な方法として知られる全体構造視聴覚方式（Méthodes structuro-globales audio-visuelles＝S. G. A. V.）や、聴覚障害、言語障害のリハビリテーションその他の分野で同じく効果的な言調聴覚法（Méthode Verbo-tonale）の基礎にある言調聴覚論は、およそ30数年の歴史をもち、その創唱者はユーゴスラビアのザグレブ大学教授P.グベリナである。その方式は我国でも若干取り入れられているとはいえ、いまだ十分でない。筆者に与えられた課題は、創唱者P.グベリナの仕事の源泉に遡って、とりわけ言語理論面についてその思索のあとを振り返ることである。

彼の仕事の最初の成果でありその後の思索の基盤となっている著作は『複文の論理的価値と文体論的価値』と題され、＜一般理論とフランス語への適用＞という副題がついている。刊行地はザグレブであるが原文はフランス語で、1939年に初版がでた。筆者の参照したのは1954年の第2版であるが、著者ははしがきで、提示される問題の現在性は依然変っておらず若干のセルボ＝クロアチア語の実例の変更増加があるだけと述べているので支障はない。＜フランス語への適用＞と副題にあるように引用される文例は殆どフランスの作家のものである。（ちなみに作家名の一部を記すとバルザック、コクトー、ジッド、フロベール、プルースト、ジロドゥ、モンテルラン等々）著作の中の随所で言及しているように、彼の思索の直接的源泉はF. de Saussureの高弟Charles Ballyである。

周知のようにソシュールはラングとパロールの弁別を強調したが、共時論的にいってラングには進化が関与しないので固定的であり、従って科学の対象としてより好んで研究されてきた。バイイはむしろ感情的なものの実現であるパロールの表現価値を重視しそれを対象とする科学——彼はそれを文体論と呼ぶ——の確立に努めた。グベリナの博士論文である上記著作はその延長線上にあるもので複文の文体論的事実の研究であるといえよう。

本書の内容は三部からなり、第一部は「理論」で第一節「文」に始まる9節で、第二部は「文の分析」で「方法」を枕に、第一章「従属節」以下4章で、第三部は「全般のレジュメと結論」で第一節「接続詞」以下3節と結論で、それぞれ構成されている。実例の引用文を多数含む第二部が分量的にみてもこの書の中心であるともいえるが、いずれにせよ全体にわたって詳細にあとづけることは不可能なので、ここではその後の彼の研究の展開と、われわれの共同研究の方向に出来るだけ関連しうる点を考慮しながら彼の説をたずねることとする。

本書の主題はタイトルに示されるように複文の研究であるが、今少し限定的にいえば「等位節と従属節との相異が実際には何のうちにあるのかを示すこと」（序文の冒頭）にある。これは言いかえると、二つの事柄を言うのに、等位の二つの文でも言えるし、従属節を含む一文でも表わすことができるがそのちがいは何かということである。その答は後のこととして、ここには単なる文法的カテゴリーのみでは収まりきらない言語観人間観が背後にあることを意味しているのである。ところで節を云々する以上（語ではなく）「文」をはっきりさせておかねばならない。第一節『理論』の第一節『文』でその定義が示される。「文とはある判断のコミュニケーションである。その判断とは一つの断言により現実化された潜在的表現である」。(p. 13) このあたりの分析は殆どバイイの『一般言語学とフランス言語学』に依據しており、理由はバイイの論が最も明晰で公正であるからだという。さてそのように定義したうえで、文に単文、複文（グベリナは拡大文 Phrase élargie の語も用いる）の２種があり、注目したいのは状況補語をもつ拡大文であるというが、理論の部では複文を構成する要素として従属節、譲歩節、補足節、等位節をあげる。文の分析をなす場合の重要な観点は論理的価値と文体論的価値であるが、従属とこわれた従属（譲歩節）、等位は３つの論理的カテゴリーにほかならない。そして一般に文の分析を人は等位節から始めるが、グベリナは分析の順序を(1)従属節(2)こわれた従属節と補足節(3)等位節とすべきだとする（p. 66)。それというのも従属関係の２つの節は唯一の同じ論理的統一を形成しており、従って等位節よりも自律的でないからである。２番目のものはその定義からして従属節よりも結びつきが少なく、等位節よりは多い。等位節はその一が他を条件づけない観念の秩序を含んでいる（p. 57)。彼が最も重視する従属節についての明快な定義はこうである。一文中に２つの節があり、それらが解消出来ない密接な論理的一体をなし、一が原因で他が結果であるような観念の関係を示すとき、それが従属文といわれる（p. 34)。

文の分析にあたってなお注意すべきは接続詞である。とりわけ複文というとまず接続詞が思い浮かぶのであるが、本書の中でもあちこちで言及されているように（例えば p. 208)、それは異る論理的タイプの導入語でありうること、従って接続詞はそれだけでは節の分析の出発点にはなり得ない、勿論意味論的価値は十二分に保持しているとしても。それ自身では我々の概念を翻訳も決定もしないことに留意しなければならない。

われわれはさきにバイイのパロール重視、さらに文の分析における論理的価値とならぶ文体論的価値の観点の必要にふれた。極めて簡略にその点をめぐるグベリナの見解を探ってみよう。第一部『理論』の最後の第九節は「話し言葉と書き言葉」の標題を持つ。

彼の基本的な立場を簡略に述べるならば、

＜言葉は人間と人間との間のコミュニケーションの手段である。＞

＜生活の必要から創られた言葉は第一に生活に役立つ。＞

＜人間の言葉を代表するのは話し言葉であり、話し言葉の諸価値で我々は我々の観念や感情をその正当な尺度で表明することができる。＞

＜多様な表現手段の撰択は話し手の心の状態に条件づけられる。＞

今少し立入った検討に入る前に、予想される反論に対する彼の反駁を聞いておこう。予想される反論：話し言葉の多くの価値を含む表現、従って多くの情動性を含む表現は書き言葉の中でも使用されうるではないか、と。彼は言う、一つの表現の聴覚的価値と視覚的価値を解読する手助けのできる与えられたコンテキストのおかげで、我々は話し言葉の中と同じ構造を書き言葉の中でも使うことができる。他方人が書く時、語はパロールと同一である。というのは、書きながら我々は語の聴覚的内容を感じているのだから。しかしその紙が語（パロール）を写しとった途端にその語は解読すべき一寸した謎になると。彼も認めるように、書き言葉と話し言葉は百パーセント同じ表現、同じ構造を持つことはできないし、文の構造をよく研究するためには話し言葉の価値を常に分析することが不可欠であるとしても、さきの「一寸した謎になる」こと自体が、面白い話ではあるが、彼の反駁に一寸した翳を落すことになりはしないだろうか。

さて少しまえに話し言葉の価値という語が現われたが、それについてやや詳しく見てみよう。（以下 pp. 59－60）言語の事実は２つの仕方で実現される。一つは耳に結びつきいま一つは眼に結びつく。即ち聴覚的価値と視覚的価値を呼ばれるエレメントである。この両者は３乃至４の部分を含んでいる。

(1)聴覚的価値　a）イントネーション（メロディー）
　　b）強度
　　c）文の間（マ）
　　d）休止（沈黙）
(2)視覚的価値　a）身振り
　　b）運動
　　c）状況

実際の文例にこれらの価値を適用してみよう。

A. Je ne sors pas, parce qu'il pleut.（私は外出しない、雨が降っているから）

B. Il pleut, je ne sors pas.（雨が降っている、私は外出しない）

前者はいわゆる直接的表現がより多い（parce que）。前半部の終の調子は前者において後者よりずっと昇り調子でない。ポーズは後者においてより大きい。A，Bを比較するとこの３点が確認され、結論としては後者の言語表現が前者よりずっと情動的である。前者は論理的秩序の表明であり、後者は我々の感情の表現である聴覚的価値によって演奏されているのだといえる。語彙論的用具が多ければ多いほど聴覚的視覚的価値は少なくなり、情動性も少なくなる。

次に話し言葉の価値の論理的重要性を示す例をとりあげる。次のように書くとしたらそれは３つの意味をもちうる。

Nous voyons et nous ne voyons pas.（我々には見える、そして我々には見えない）

1）Nous pouvons dire que nous voyons et que nous ne voyons pas.（我々には見えるということと見えないということがいえる）

2）Tantôt nous voyons, tantôt nous ne voyons pas.（あるいは見える、あるいは見えない）

3）Bien que nous voyions, nous ne voulons pas nous en rendre compte.（我々には見えるのに、それがわかりたくない）

他方上記の文を3つの論理的意味の中で発音してみよう。聴く人は少しの疑いも持たないだろう、というのは、メロディーと身振りが観念の正確な注釈であろうから。その人は同時に構文の情動性を感受しているのである。その他いろいろのケースを分析してみると、話し言葉の価値は①それが表現の中に入れば入る程表現はより感情的であり、②我々に多くの語彙をなしにすまさせ、③構文の文体的価値を決定しないばかりでなく、論理的価値も決定しない。2つの異るカテゴリーに対する同一の言語的表現は、その都度話し言葉の異る価値に伴われる、という結論に導かれる。本書の第二部「文の分析」では、話し言葉の価値が前記の4つの節の論理的、偶然的秩序にいかに干渉するかをみることになるといえる。（引用の文例は非常にたくさんあるので、ここでは実例としてほんの2、3例を示そう。

Et, bien qu'il connût ce pauvre diable, il feignit de le voir pour la première fois. (Flaubert, Madame Bovary, p. 393) (p. 135)（で、彼はこのあわれな奴を識っていたけれども、始めて会うふりをした。）これは現実的なこわれた従属節 subordonnées brisées réelles の例で、座礁した現実的原因が bien que による最少限の情動性で表現されている。こわれた従属節の本質的特長である事実の対位は話し言葉の価値を目立たせる。又このこわれた従属節は対立の等位節とともに感嘆節のグループを構成する。それらの論理的価値は常に驚き、反対を表わし、それから生じる感情は非常に強く、ぶっきらぼうである。(p. 222)

Vous l'avez voulu, vous m'avez couvert de votre mépris, vous m'avez défié, j'ai parlé! (Balzac, Cousine Bette. I. p. 21)（p. 78）（あなたがそうしたいと仰言ったのだ。あなたは軽蔑するようなことばを私に浴せかけた、私を挑発された、だからしゃべったんです！）接続詞のない結果節は感情の激しさを表明しうる。

結果節にせよ、原因節にせよ、あるいは分離的等位節にせよ、その論理タイプの本質的なメロディー曲線を保持しながらも、強い感情が早いテンポと非常に強い音声の保持を要求し、そこから容易に情動性が浮かび出てくるのである。(p. 222)

Gamelin ne pouvait passer sur le pont neuf ou devant la maison de ville sans que son cœur bondit vers la tente pavoisée. (A. France, Les dieux ont soif. p. 18)（p. 74）（ガムランはポンヌフ橋の上や市庁舎の前を通るといつも、旗で飾られているテントをみて心を躍らせるのだった。）結果節の一例。2つの行為は1つの論理関係によって結ばれ感情に浸透され、聴覚的価値と視覚的価値の豊かな使用によってのみ理解しうるものとなりうる。sans que により導入される結果節にも同様の文体的効果が付与されるが、それが et の否定形にほかならないからである。

結論的に整理しよう。言語形式を研究するということは、それらが外に表わすものを探究すること、語る主体にかくかくの表現を用いるように引張っていったものを解読することである。音としての語から出発することにより我々はその現実的価値――その語が語る主体に対して意味するものと聴く人に対してそれが表わすもの――に到達することが不可欠でありそこから論理的内容統一の関係として、従属、こわれた従属、等位の３つのカテゴリーがたてられる。その上で表現のもう一つの価値、文体論的価値が分析されねばならない。観念はいろんな仕方で表明されうるし、他方同じ言語的形式が種々の論理的価値を表明するから、両方の分析は平行して進めなければならない。そしてしかじかの表現をえらばせるのは常に情動性の種々の度合だということが肝要なのである。我々がいつも話し言葉の価値を考慮する理由は何よりもそれが情動性の表現であるからだ。(pp. 207～208)

最後に話し言葉の価値のさまざまな種類の概括表をあげておこう。(pp. 221－223)

ａ）陳述的（平叙文）

結果節、時を表わす従属節、時を表わす等位節、非現実の条件節、原因理由節、附加的従属節。

ｂ）疑問的（論理的価値は内容が答を要求する如きもの）

可能の条件節、目的節、分離等位節。

ｃ）感嘆的

こわれた従属節、対立等位節。

各グループはそれぞれに基本的メロディ曲線をもつ。グループ内でもテンポやポーズに変化があるのはいうまでもなく、それも主体の情動性に基くのであることが知られる。

第二次大戦中はイタリアで実験心理学（音響心理学）研究に、戦後は国連本部時代のベル電話研究所での研究に従事したグベリナは1953年ザグレブ大学にユーゴスラビアで初のランゲージ・ラボラトリーを設置した。以後今日に至るまで実験的実証的に本稿冒頭に述べたような諸領域諸問題について精力的かつ広域的な研究実践が、グベリナ個人としても学派としても行なわれてきている。文体論研究を彼は止めたわけではなく彼の母国語で書かれたその方面の著作もあるが、中心は上記の方に移行しているようであるが、その基本的な考察の枠組がすでに明らかにこの著作の中に見てとれることは粗描的な本稿の行間からも十分に察せられると思う。